

イギリスにおける経済学史研究の形成、1870s－1920s

西沢 保

はじめに

およそ『国富論』刊行100年の1876年から、刊行150年の1926年にいたる50年間』を検討の対象にしたい。1926年は『自由放任の終焉』が出た年でもある。N. B. ハートは、学科としての経済史が隆盛を誇った1970年代に初めに「経済史学の形成」（1971年）を書き、それはヴィクトリア期末に「離陸」し、エドワード期初めに「成熟への前進」を経過したと述べた。1926年にアシュリーを会長に創設されたイギリス経済史学会は、翌年から *Economic History Review* を創刊し今日にいたっている。経済史学の形成と比べ、イギリスにおける経済学史研究の形成はどうだったのだろうか？

1. 経済学の危機と歴史への回帰

イギリス古典派経済学は、「その母国で、その経済史が活気をもち勝ち誇っていた時期に、他のいかなる経済思想も比肩できないような影響力、支配力、および権威をもった」（ハチスン、1978）。『国富論』100年は、経済学クラブによって盛大に祝福された。しかし、同じ1876年にジェヴォンズは「経済学の将来」で、経済学が「混沌状態」にあることを示し、バジヨットも100歳を迎えたイギリスの経済学が「人々の頭の中で死にかけている」と書いた。1877年にはイギリス科学振興協会から「経済学・統計学部門」を除く提案がされ、翌年イングラムもF部門の会長就任講演で経済学の「危機」を表明した。

1870年代のイギリスはいろいろな意味で転機であった。1860年代末から1870年代初頭、「イギリスの経済学の歴史における重要な転機」（ハチスン）であり、バジヨット、クリフ・レズリー、ジェヴォンズ、そして若きマーシャルのような「新しい経済学者群」の登場があった。『国富論』100年の討論会にはラブレールもあり、リカード派の解体によって生じた経済学者の分裂と新しい経済学研究の潮流を示し、「講壇社会主義者」「歴史学派」あるいは「実証学派」（Realist School）の興隆を明示した。ジェヴォンズも、アダム・スミス以降、経済学を歴史的に論じようとする優れたイギリスの経済学者が存在したことを示した。

2. ジェヴォンズとフォクスウェル

ジェヴォンズは、理論的能力と別に、多面的な才能をもち、太陽黒点説でも知られる景気変動、物価に関する帰納的研究に加えて、「異常に強い歴史的性癖、好事家的性癖」さえあった。彼は、景気循環の歴史を18世紀初頭にまで辿り、何世紀にもわたって収穫統計を調査し、「経済史の分野、物価史及び景気変動史の開拓者」になった。経済学の歴史には一層深い関心をもち、自分が手を染めた経済学の領域でまだ知られていない、あるいは忘れられた先行者を探しだした。その顕著な例がカンティロンであった。

ジェヴォンズは経済学の文献目録においても先駆的業績を残し、ワルラス、コッサ、フィッセルングの協力を得て、数理経済学に関する書誌目録を作成し、フォクスウェルの協力で貨幣・金融問題に関する書誌目録を作成した。ジェヴォンズは生まれながらの収集家で、「経済学獵書家の著名な一党の最初の人」であった。彼は、無名の経済書やパンフレットの収集を思いつき、「最初にこの病をうつされた」のがフォクスウェルであった。クレス文庫、ゴールドスミス文庫として知られるコレクションの最初の原動力は、UCLにおけるフォクスウェルの前任者ジェヴォンズによるものであった。

ジェヴォンズの経済学史：『経済学の理論』第2版（1879年）への長い序文は、ジェヴォンズの経済学史とも言える。そこで彼は、リカード以後のイギリスにおける経済学の理論的展開における狭隘な島国性に対する強い不満を表明した。「イギリスでリカード派の経済学者に賦与されてきた排他的重要性は、多かれ少なかれ厳密に数学的な仕方です学を取り扱った一連のフランスならびに少数のイギリス、ドイツ、イタリアの経済学者の存在を知るのを妨げてきた。」マルサスやシーニアのような経済学者は、「リカード＝ミル派の統合された影響力」によって舞台の外に追いやられた。真理はフランス派の側にあるとして、ジェヴォンズはデュピュイ、クールノー、そしてゴッセン、チューネンらの理論史を書いた。

ジェヴォンズは、「通貨の数学的理論」の構築を試みた *Essay on the Theory of Money* (1771) について、それを偶然本屋で見つけたが、イギリスではまったく忘れられているこの書が外国で知られていることに気づくのは恥ずべきだと書いている。この書は、ロッシヤーやシュタインのもとで学んだイタリアの歴史派経済学者コッサによって紹介されていた。コッサの *Guida allo Studio di Economia Politia* は、明治期の日本でも英訳から翻訳されて広く読まれたが、ジェヴォンズによれば、「簡潔で思慮深く書かれた教科書」で、「わが国の経済学の島国的狭隘さについて我々を開眼させるのに十分」であった。ジェヴォンズはコッサの英訳を勧めたようで、*Guido* 第2版（1878年）の英訳（1880年）に序文を寄せている。それによれば、これ一冊で、経済学の定義、分野、他の諸科学との関係などを概観するだけでなく、「イギリスの読者にはまったく新しい経済学の歴史的素描」を提供していた。

3. イギリス歴史学派と社会改良の経済思想史

クリフ・レズリーとイングラム：クリフ・レズリーは、メインの比較法制史に強い影響を受け、リチャード・ジョーンズの伝統を復活させた。「アダム・スミスの政治経済学」「政治経済学の哲学的方法」等で、経済学は歴史的存在であるべきで、社会の歴史的進化の過程における経済的側面と他の諸側面（道徳的、知的、法的、政治的）との結びつきが追究されるべきことを主張し、「経済人」を否定した。イングラムは、コントの実証主義哲学の影響を受け、経済現象を他の諸側面との関連で捉える必要を説き、経済学より広い一般社会科学、あるいは社会学のなかで有効に理解できると考えた。『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の「政治経済学」を改訂増補した『経済学史』（1888年）は、イギリスでおそらく最初のまとまった経済学史書であり、日本語を含む9カ国語に翻訳された。それは、序章、古代、中世、近代の第1・第2期、近代第3期・自然的自由の体系及び歴史学派という5つの章からなり、自然的自由の体系の相対化がねらいであったように思われる。

オクスフォード・エコノミスト：歴史派経済学者がまず手がけたことは、経済生活の多様性を示す歴史的資料や記録、経済文献を集め、それらの生成発展の順序を明らかにすることであった。自然的自由の体系はそのままではうまく機能しなくなっており、歴史の画期に対してこれまでとは違った評価が与えられた。共同体の規律、経済活動の道徳的規制が重んじられた中世が再評価され、重商主義の時代も好意的に描かれて、レッセ・フェールが勝利を収めた時代に対する評価を逆転させた。トインビーは、産業革命の帰結を非難し、それと「旧派の政治経済学」を結びつけたが、アシュリーをはじめ、多くのオクスフォード・エコノミストと「LSE制度主義者」はそれにならった。歴史派経済学者は、経済史と応用経済学のような帰納的研究が、正統派・新古典派の経済理論よりも社会改良と政策形成により適切な指針を与えると考えた。

オクスフォード理想主義、トインビーの経済史・経済思想史研究の理念は、アシュリー、ウェッブ夫妻、ハモンド夫妻、R. H. トーニー、G. D. H. コールのような経済史研究の「改革派」(reformist)グループ、社会民主主義の経済学者を生み出し、マーシャル派経済学者クラップムのような「中立派」(neutralist)とは別の経済史研究の伝統をつくることになった。

トインビー『18世紀イギリス産業革命史講義』（1884年）

L. L. プライス『イギリス経済学小史—アダム・スミスからアーノルド・トインビーまで』（1891年）

アシュリー『イギリス経済史及び学説序論』*An Introduction to English Economic History and Theory*. Part I. The Middle Ages, Part II. The End of the Middle Ages. (1888, 1893)

Surveys, Historic and Economic, 1900.

ed. J.S. Mill, *Principles of Political Economy*, 1917.

W. A. S. ヒュインズの重商主義研究

4. マーシャルとフォクスウェル

マーシャルの経済学史：マーシャルは『経済学原理』の付論A「自由な産業と企業の成長」で経済的自由の発達を論じ、付論B「経済学の発達」を述べている。付論A, Bは、『原理』第4版までは、第1編第1章序論に続く第2, 3章であった。正統的・新古典派的な著作のなかで、マーシャルほど歴史的素材を扱った著作は、スミスを例外として、後にも先にもなかった。付論Bはマーシャルの経済学史と言えようが、クリフ・レズリー、バジヨット、トインビー、ジェヴォンズのような新しい潮流を紹介し、経済学者の「フランス派」「アメリカ派」について論じた後、ドイツの経済学について次のように述べている。「近年ヨーロッパ大陸でなされた経済学上の業績のうち、最も重要なものはドイツのそれである。…ドイツ人は経済史においても「比較史」研究の先鞭をつけた。…この学派の指導者とその国外の協同者たちが、経済的な慣習と制度の歴史を跡付け説明するために企てた仕事の価値は、いかに高く評価しても誇張というに当たらない。」リカードと彼の追随者は、「現代の経済学者が抱いている労働者階級の生活状態の巨大な改善可能性に対する信念を抱いていなかった。」旧派の経済学者は、人間の性格と能力は不変であるかのように論じているが、現代の経済学者は生活環境の所産だということを常に忘れないようにしている。マーシャルは快樂主義を実質的に拒絶し、リカード、ミルの「静止状態」のかわりに進歩という概念をおいた。イギリスで限界革命を導いたのはジェヴォンズであったが、自由主義経済学を古典派経済学の頸木一陰鬱な科学、収穫逓減、静止状態、賃金基金、マルサスの大難問一から解放したのは、マーシャルであった。

マーシャル、フォクスウェル、ピグー：マーシャルは分析的な経済学の達成のために妥協がなく、カニンガムとの闘いにもみられるように同僚の仕事にも介入した。マーシャルとフォクスウェルは、経済学トライポス形成のために緊密な協力をした。しかし、彼らの理念と方法は大いに異なり、1903年以降顕在化した。マーシャルはフォクスウェル宛てに、「本や冊子が貴兄を喜ばせる時、貴兄はそれを「学問的」と言います。他方、私の方は完ぺきに「科学的」だと思われないものは何であれ、私を興奮させることはあ

りません。…貴兄が事実に関する正確さにより大きな重点を置くのに対して、私の方は困難な分析及び推論に取り組むことをより強く主張します」(12 Feb. 1906)。マーシャルはカリキュラムの編成で、フォクスウェルを経済学の主流からはずし、経済史、経済学説史、社会主義のような科目に移そうとした。フォクスウェルの講義はロンドン・スクール風で、ケンブリッジの3年次にふさわしいとマーシャルは考えなかった。フォクスウェルの専門とする経済学説史・経済思想史は、マーシャルにとって二次的な科目であり、「選択科目」であった。マーシャルは、経済学教育を「歴史的で文献的な観点とは違った科学的な観点から扱う」ことを願い、「ピグーに自分の欲するものを見出した。」

ピグーが教授職に選出された後、フォクスウェルの教え子で友人のヘンリー・ヒッグズは、フォクスウェルのために教授職(a personal chair at Cambridge)を設立しようとした。これに関連してマーシャルは、ネヴィル・ケインズ宛てに「もし、第2教授職がクラッパムに行くべきかフォクスウェルに行くべきかという問題が持ち上がったら、私はクラッパムを支持せざるを得ません。…フォクスウェルが依然として最盛期にあるとしても、クラッパムと同じ知的水準に置くことは躊躇うでしょう」(13 Dec. 1908)。

5. おわりに

本稿では、イギリスにおける1870年代から1920年代にかけての経済学史研究の形成を概観し、ジェヴォンズの経済学史、歴史学派の経済思想史、マーシャルの経済学史に焦点をあて、経済学史の意味・意義を検討したい。

1870年代から1920年代にかけて、イギリスの経済学史研究は、経済史学のように学科として制度化することはなかったが、経済学史研究の環境基盤、学問的環境はおそらく格段の進歩を遂げた。その顕著な表れの一つがキャンナン版『国富論』の刊行であろう。キャンナン、フォクスウェルの経済学史研究についても言及したい。